



『ラウレンシア』でのナタリヤ・オシポワとイヴァン・ワシーリエフ Photo: E. Kauldhar/Dance Europe

ミハイロフスキー・バレエの『ラウレンシア』

オシポワ、ワシーリエフ主演によるロンドン公演の熱い舞台を、マイク・ディクソンの評でお伝えします。

ソ連体制下のロシアでは、共産主義の浸透を図るために、政治的なメッセージを正面切って打ち出すバレエが多数作られた。『赤いけし』(1927)や『パリの炎』(1932)はその典型的な例だが、近年、そうした旧作の改定や復元が相次いでいる。なかでも秀逸なのが、ヴァフタング・チャブキアーニの原振付演出(1939)を忠実に再現した、ミハイル・メッセレル版『ラウレンシア』である。ミハイロフスキー・バレエは、三度目となるこのたびのロンドン公演でこれを上演した。

『ラウレンシア』初演版は、タイトル・ロールを踊ったナタリヤ・ドゥジンスカヤとその恋人フロンドーソを自ら踊ったチャブキアーニの才能を余すところなく示した作品で、後にはマイヤ・プリセツカヤ、ニネル・クルガブキナ、ルドルフ・ヌレエフ、ウラジーミル・ワシーリエフらが踊っている。今回主役を務めたのは、1970年代に途絶えたかに思われたソヴィエト・スタイルの超絶技巧を現代に蘇らせた、現代のスーパースター、ナタリヤ・オシポワとイヴァン・ワシーリエフである。オシポワは絶好調で、トリプルを連発してのフェツェやピルエット、正確でしかも生氣あふれるジャンプを披露した。演技には情熱がほとばしり、とくに村人たちを先導して専横な領主に反旗を翻す最後の二場面が印象的だった。ワシーリエフは小柄ながらひじょうにエネルギッシュで、彼ならではの水平に浮くジャンプやトリプルのトゥール・アン・レールの見事さは、筆舌に尽くしがたい。ブラヴューラの本質である勇気と大胆不敵とスリルを体現する二人の踊りに客席からは期せずして歓声があり、しばしの間を置いてから盛大な拍手が沸き起こった。

アレクサンドル・クレインの音楽は、感情に強く訴える力を持ち、艶やかでもある。ヴァレリー・オブシャニコフの指揮にも気迫がこもり、次々と繰り出されるソロ、デュエット、アンサンブルの魅力をよく引き出していた。

この二幕のバレエの原作となったのは、ロベ・デ・ベガの名作戯曲『フエンテ・オベフーナ』。ラウレンシアと婚約者フロンドーソが先頭に立って、非道で好色なグスマンに復讐を果たすまでを描いている。身分の低い農民たちは礼儀正しく高潔で、裕福な貴族たちは墮落しているというのは、たとえばグリゴローヴィチの『スパルタクス』にも見られるとおり、初演当時のソヴィエト・バレエに共通するパラダイムである。ストーリーは底が浅く、悪役と村人たちの対決を羅列しただけともいえるが、ダンス・シーンを盛り込むためには格好の口実になる。たとえば第二幕の幕開きの結婚式でのパ・ド・シスは、オシポワとワシーリエフにヴィクトリア・クテボワ、ヴァレリア・ザバスニコワ、ニコライ・コリパエフ、アンドレイ・ヤフニュークが加わって、全編を通してもっとも輝かしいダンス・クラシックの見せ場である。ミハイロフスキー・バレエのアンサンブルは全員が心を合わせた踊りで作品の真価を示したし、数名での踊りにも新鮮で鑑賞に値するものが多かった。サビーナ・ヤパーロワのパスクァーラは温かく寛大なところと美しいポール・ド・ブラが魅力的で、自然な笑顔によってたちどころに客席と心を通わせ、観る者を虜にした。悪辣なグスマンの最初の犠牲者を演じたオクサーナ・ボンダレワは気合いの入った踊りで、引き裂かれた洋服を強く印象付ける演技も巧みだった。ミハイル・ヴェンシコフは領主を好演し、カーテンコールではイギリスの流儀である悪役への盛大なブーイングを受けながら、最後まで役を演じきった。

ミハイル・メッセレルはこの素晴らしいプロダクションにさぞ誇らしい思いだろう。スター・ダンサーも群舞も実力を存分にアピールし、オシポワ(彼女は来シーズン、プリンシパルとしてロイヤル・バレエで踊る)とワシーリエフにとっても、これはまれに見る名演だった。だがいちばんの賞賛を受けるべき人といえば、やはりメッセレルをおいて他にないのである。(訳:長野由紀)